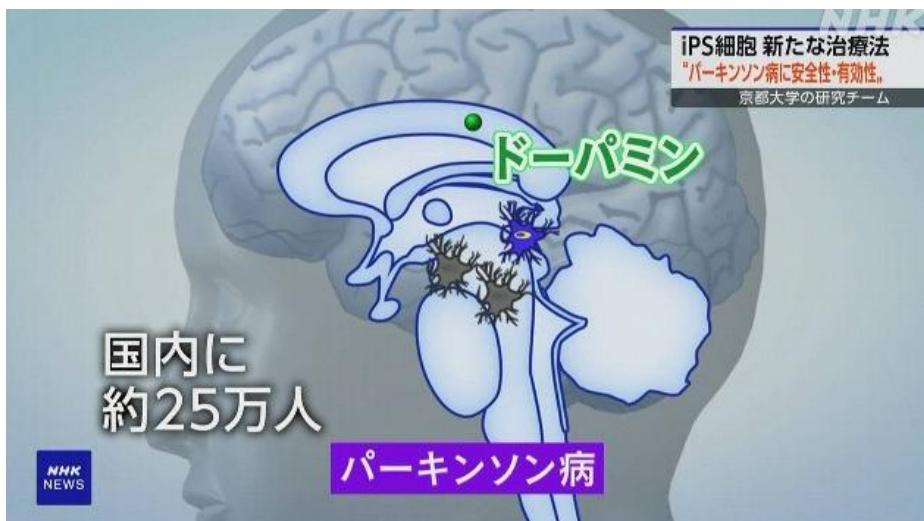




## iPS 細胞を用いたパーキンソン病 治療治験で“有効性” 京都大

この記事は NHK News Web に掲載された記事を引用しております。

パーキンソン病の患者の脳に iPS 細胞から作り出した細胞を移植する新たな治療法を開発している京都大学の研究チームは、7 人の患者を対象にした治験の結果、安全性と有効性が示されたと発表しました。治験に協力した製薬会社は今後、国に製造・販売の承認申請を行うことにしています。



パーキンソン病は、「ドーパミン」という神経の伝達物質を作り出す脳の細胞が失われることで、手足が震えたり体が動かなくなったりする難病で、国内にはおよそ 25 万人の患者がいるとされています。

主に薬の投与や電極を脳に埋め込むなどの治療が行われていますが、現在、根本的に治療する方法はありません。

京都大学 iPS 細胞研究所の高橋淳教授らの研究チームは、ヒトの iPS 細胞から作ったドーパミンを作る神経細胞を患者の脳に移植することで症状の改善を目指した治験の結果を発表しました。

治験では、50 歳から 69 歳の男女 7 人の患者の脳に 500 万個または 1000 万個の細胞を移植し、すべての患者で健康上の大きな問題は見られなかったということです。



このうち 6 人について 2 年間にわたり経過を調べたところ、いずれの患者でも移植された細胞からドーパミンが作り出されていることが確認されたということです。

また、症状の程度を調べる検査では 6 人のうち 4 人で運動機能の改善が見られたということで、研究チームは「安全性と有効性が示された」としています。

治験に協力した大阪の製薬会社、住友ファーマはこのデータをもとに国に製造・販売の申請を行うことにしています。

高橋教授は「細胞移植で症状が改善するというのは研究者にとっては革命的だ。

国の承認を得て一日も早く患者に治療を届けたい」と話していました。

## 専門家 “服薬の回数減や生活の質の向上期待”

今回の治験の結果について、パーキンソン病に詳しい順天堂大学の服部信孝特任教授は「治療の新たな選択肢になるかもしれないという点で患者にとっては朗報だと思う。この治療法が確立されれば、服薬の回数を減らしたり、場合によっては服薬をなくしたりすることができるかもしれないし、患者にとっては寝ているときの状態がよくなったり、飲み忘れのおそれが減ったりすることで、QOL=生活の質の向上が期待できる」と話しています。

そのうえで、「治験の結果を見るとすべての患者が劇的によくなっているわけではないが、高い効果が見られた患者もいる。より早い段階で移植をすると、症状が長期にわたって安定する可能性があるが、今後、どういった患者に効果があるのかを検証する必要がある。今回の治験では効果を調べた患者が少なく、まだ分からぬ点も少なくないので、より効果的な方法を明らかにすることも必要だ」と話していました。

京都大学 iPS 細胞研究所の高橋淳教授は「最適な投与量やどのような患者に効果が期待できるかという方向性も見えてきたので非常に意義のある結果だと考えている」としたうえで、「初めてのヒトでの治験なので、症状が重かつたり年齢が高かつたりする患者に少なめの細胞を移植することから始めている。今後、より効果が期待できる患者を対象にして移植する細胞を増やすなどして段階を踏んでいくことで最終的には細胞移植だけで十分な量のドーパミンが補われて、薬が必要なくなるようになることを目指したい」と話しています。

公益財団法人

京都大学iPS細胞研究財団

イーパートナーズ株式会社は京都大学iPS細胞研究財団の賛助会員です